

会員だより

梶本家の藤の花見物

泉南の方に藤の花のきれいなところがあると聞いて出かけました。

JRの和泉砂川にあるという事です。天王寺から約50分、砂川駅からインターネットによると徒歩8分、または11分と歩いてきましたが、私の足では20分以上を要しました。梶本様という個人の住宅で、樹齢30年を超える藤を育てておられて、一本の樹ですがその一本に4万の花房を付けるというまでになったのです。この藤は野田藤と言って発祥は大阪福島区の春日神社という事です。そういうえば福島の近くに「野田」というところがあります。関係があるのでしょうか。場所は熊野街道沿いで、紀州街道とも呼ばれています。梶本家の玄関口は街道に面しており、立派なお屋敷でした。左手の入り口から藤の花のお庭に入れるようになってます。入場は無料です。入ったところ藤棚があつて紫の藤の花房が見事に垂れて

おり多くの人が見上げています。少し奥に入ったところに、鉄の梯子の様な階段があり、展望台になっています。手すりは付いていますが急な階段で、しばしためらいましたが、せつかくここまで来たのだからと思いつつ登りました。テレビで見たときは、藤の花が満開でそれが所狭しと咲き誇つてそれは見事でした。



梶本家の藤の花

その光景を頭に描きながら、台面上上がった途端、私はへなへなと崩れそうになりました。そこにあつたのは見るも無残な光景でした。花の盛りは、過ぎて色の変つた花房が物凄しい量で存在しており、なにかむごたらしい感じがしました。こわごわ階段を下りて、先ほど見た藤棚を見ると、ここにはまだ紫の花が美

しく花房を垂れており、こだけの見物だったらそれはそれでいい藤のお花見だったと思えました。でもあの展望台からの壮大な眺めを見ることが出来なかつたのは残念でした。「ああ、花は遅かつた」いえ私が行くのが遅かつたのです。ちなみに「藤まつり」の期間は、前日まででした。

記・写真…牧戸富美子

大長寺は戦火を受けても近松門左衛門の名は消えず

大長寺は戦火を受けても近松門左衛門の名は消えず

3月22日VG観輪の「わがまち紹介」の大阪造幣局の帰り、姉の山田昭子と二人で近くの大長寺に寄ることにした。地図ではすぐ近くの筈が、タクシーはある区画を2〜3回廻つて、なんと最初の大通りで見つけてくれた。確かに寺の白壁と瓦屋根と黒い金属扉が閉まつた10mくらいの間口の建物で見つけにくい。わざわざこの寺を訪れたのは亡くなった母や兄の会話によく出てきた。私達の実家が明治時代より檀家としてお世話になつたお寺である。というより



「心中天の網島」小春治兵衛の比翼塚

近松門左衛門が享保5年(1720年)、この寺で起きた心中事件を題材に書き下ろし、大人気を得た「心中天網島」のモデルになつた寺である。(あらずじは、「VG観輪」のホームページをご覧ください)

私達が住んでいたのは今の天満駅付近だが、昭和20年6月7日の大空襲に遭い、この一帯が焼け野原になつた。この寺も焼け落ち、やつと昭和46年に落慶となつた。この大長寺は明治42年まで北800mの今の藤田美術館辺りにあつたが、明治の豪商藤田伝三郎氏が藤田邸や太閤園や美術館や巨大な庭園整備に現在の地へと移らせた。政商にもなつた藤田一族は巨万の富を得て、男爵の位も得、5月5日の節句には子供を連れて行けばみんなにお菓子をくださつたと母は言っていたが、へそまがりの私には少

しもあり難いとは感じない。私達二人は閉まっている通門を恐る恐る押して中に入ると、敷地一杯に檀家の墓石と浄瑠璃で有名ななつた「小春、治兵衛の比翼塚」が黒くなりながらもつしりと構えていた。さすが戦火に耐えたらしい。江戸時代の狭客の碑や移籍前の庭の再現コーナーもあつたが、昭和20年8月14日の大空襲でなくなつた人への護讃地藏菩薩の方が心に残つた。終戦前日の事である。寺の建物は三階建てのマンション風で寺院として重厚さに欠けているように思ったが、本堂に入らせていただくとき意外に広く、その奥にはご本尊が燦然と輝いている。私は思わず手を合わせて涙がでてきた。みんなに守られた78年間の自分の命に対する感謝の念だろうか。

昭和20年6月7日、連合軍米軍B29の数知れぬ襲撃に、母と4歳半の私は、家の前にあつた防空壕で耐えきれず、おんぶされて2〜3キロはある城北公園に逃げた。季節柄、夏蒲団を背中にかぶつて逃げたが、自警団かどなたから敵機から見えやすいと橋の上で捨てさせられた。今回造幣局に行くとき渡つた桜宮橋か源八橋であろう。さらに桜宮小学校に一晚過ごし、家に戻ると何もなく、愕然とした。母は明日の命も分らない、死ぬなら一緒にお願い、兄を石川県に学童疎開している山田昭子を迎えに行かせ、家族一同、親戚や会社の寮をたどり、池田に至つた今の命である。最近ある俳句蘭を引用させていたでいて悪いが、「B29や炎の中の雛人形」。多分3月に空襲にあつた人だらうが、私達には疎開の荷物に入らず、最後まで楽しんでいたアルバム帳の焼失を惜しむ。私達姉妹のただ1枚の写真が叔父の家にあつた。



私達姉妹の貴重な写真

当時の子供達にはB29とは悪者の象徴として、会話にでていた。現代の子には死語になってしまったか、オスプレーの時代である。

記・写真…上村サト子